

神さまになんて 成れなかつた



神さまになんて成れなかつた

かつて人間の子どもと友達であった怪異のあなた。

そういえば最近会っていないことに気付いたあなたは、友達を探しに行く。

やがて高校生になった友達と再会するが、怪異と人間が共にいることは難しくて――？

怪異のあなたへ

ようこそ、怪異のあなた。

これよりあなたは、怪異として、友達との破滅的な物語を遊んでいただきます。

怪異というのは、人には見えない心霊のようなものです。

妖怪、幽霊、神霊、都市伝説……とりあえずは、そういった超常的で霊的なものだという認識で構いません。

まあ、怪異は怪異ですので、その存在の定義について深く考えなくて大丈夫です。

人間にとって怪異は、基本的に危険な存在です。

そのため霊能者とかいう人種が怪異を祓おうとすることもありますが、心外ですよ。

ともかく、怪異は人間とは相容れないということです。

そんな怪異と人間ですが、中には友情を育む者たちも存在します。あなたも、そのうちのひとりでした。

あなたについて

あなたは、これを読んでいるあなた自身でも、自分が思い描く理想のキャラクターでも構いません。

想像力を使って遊ぶゲームブックなどに慣れてない場合、自分自身として遊ぶことでより没入して遊べることでしょう。

……あなたは人間であって怪異ではない？

でしたら、自分自身をベースに、怪異の自分を思い浮かべて遊んでみてください。

また、この物語は『303号室の神さま』らしい、友情の物語です。

そのため怪異であるあなたには、人間の友達があります。

その大切な友達について、ご説明いたしましょう。

あなたの友達

河森恭子

17歳。女子高生。

怪異が見える体質で、幼少期はずっとあなたと遊んで過ごしていた。かつては怪異が見えるせいで学校で浮いていた。

そういった事情もあり、怪異であるあなたに少し依存気味であった。

あなたとは友達同士であったが、ある日霊能者の少女により“怪異が見えなくなる処置”を施される。

今ではあなたのことを忘れて、普通的女子高生として生活している。

「ねえ、怪異さん。また明日も遊ぼうね。……えへへ、約束だよ」

「怪異……？ なんだっけそれ。私、靈感とかないから……」

友達のことが分かったら、次に進みましょう。

あなたの友達はもっと違う子？

申し訳ありません。もしかすると、あなたとなんの接点もない人間を紹介してしまったかもしれません。

でしたら大変失礼しました。

これからあなただけの物語を遊ぶのですから、その友人も、あなただけの友人であってほしいですよ。

先ほど紹介した『河森恭子』ではない者と物語を紡ぎたいのであれば、どうか『あなただけの友達』のことを教えてください。

まず、あなたの友達の名前はなんと言いますか？

友達の性別はどうでしょうか？

年齢は……この物語の友達は高校生ですので、16歳から18歳となりますね。

それから、友達の容姿はどうですか？

髪は長いでしょうか？ 短いでしょうか？

顔立ちはカッコいい寄りですか？ 可愛い寄りですか？

……教えてください、ありがとうございます。

今あなたの頭の中には、ひとり人間が思い浮かんでいるはず。

その子と一緒に、ぜひ物語をお楽しみください。

オープニング

1. 昔日

解説

これは、あなたが友達と一緒にいた頃の場面です。

あなたは、その人間が大好きでした。

その頃の様子を、物語の導入として紡いでいきましょう。

描写

夕暮れ、街外れの人気のない公園。

怪異であるあなたは、人間の友達と一緒に遊んでいた。

「ねえねえ、次は鬼ごっこして遊ぼうよー」

まだ幼い友達は、無邪気に笑ってあなたの手を引っ張る。

当然、あなたはその誘いを拒まない。

あなたも、友達のことが大好きなのだから。

あなたにできること

ここではあなたは、友達と一緒に遊ぶことができます。

さて、あなたたちは、どのようにして遊んでいるのでしょうか？

友達に誘われるまま、鬼ごっこをして遊んでいますか？

それとも別の遊び……かくれんぼやお手玉などをして遊んでいますか？

選択肢：鬼ごっこ

もしあなたが友達と鬼ごっこをして遊びたいのであれば、その様子を想像しましょう。

きっと怪異であるあなたは、人間の子どものなんて簡単に捕まえられるはずで。

そうして友達を捕まえれば、彼女は「また捕まっちゃった」と楽しそうに笑ってくれます。

そしたら友達は「次は私が鬼」と、小さな足をめいっぱい動かして、あなたを追いかけてくるでしょう。

選択肢：他の遊び

かくれんぼをして遊ぶなら、友達は公園のどこかに隠れます。

小さな身体を遊具の陰に隠す少女を、あなたは少し時間をかけて見つけることでしょう。

そうすれば次は鬼を交代して、あなたが隠れる番になります。

描写

一通り遊ぶと、友達は公園に設置された時計を見て、「あっ」と声を漏らす。

どうやら、もう帰る時間が来てしまったようだ。

「ねえ、怪異さん。また明日も遊んでくれる……？」

友達はおもむきおとしながら、あなたにそう訊ねてくる。

あなたが頷いてやれば、友達はパァと笑顔を咲かせることだろう。

怪異と人間は相容れない。

怪異と人間は一緒にはいられない。

けれど、あなたたちは友達だ。

自分たちは例外なのだと、このときのあなたは思うだろうか。

友達とずっと一緒にいられると、あなたは思っていたのだろうか。

なにせよ、さよならの時間がやってきて、友達は名残惜しそうに帰路につく。

「ばいばい、また一緒に遊ぼうね！」

そうしてその姿を見送った日から、友達はあなたの目の前に現れなくなった。

メイン

2. 再会

解説

友達を探す場面です。

最近見かけない友達に会うために、街を探索しましょう。

描写

最近、友達が会いに来てくれない。

さみしくなったあなたは、友達を探すことにした。

街やら林やら、友達がいそうな場所をしらみ潰しに探すあなた。
そうしてしばらく、あなたは高校という場所で、友達を見つける。

あなたにできること

あなたは、友達を探すことになります。

その際、あなたはどのようにして探し回るのでしょうか？

友達を探すところを想像してみてください。

怪異であるあなたには、もしかすると人探しに役立つような力があるのかもしれませんが。

そういったものがなくても、歩き回ればいつかは友達を見つけることができるでしょう。

あなたは怪異。人間とは違い、時間はほぼ無限にあるのですから。

友達を探す様子を描いて遊んだら、次の描写に進みましょう。

描写

見つけた友達は、記憶にあるよりもうんと大きくなっていて。
怪異の時間間隔は、人間のそれとは異なる。
ちょっとしか経っていないつもりだったが、どうやら数年という
時が経っていたようだ。

まあ、時間の経過など些細なこと。
あなたは友達に、いつもみたいに声をかける。

が、またまた驚くべきことに、友達はあなたが……怪異が見えな
くなってしまっていた。

あなたの知らないうちに、霊能者とかその辺の存在が、友達から
靈感を消したのだろう。

なんということだ。これではいつものように友達と遊ぶことがで
きない。

しかし、自分を見てくれないとはいえ、今更友達と離れるのもさ
みしいもの。

ひとまずあなたは、友達に取り憑いて、一緒にいることに決めた。

3. 報復

解説

友達が学校で嫌がらせを受けている場面です。
もちろん、友達であるあなたは見過ごすことができません。
怪異の力で、友達を傷つける悪いやつを懲らしめましょう。

ああ、そいつらをどうしても構いませんよ。
あなたにとって重要なのは、友達だけです。

それ以外がどうなろうが、あなたからすればどうでもいいことですから。

描写

大きくなった友達に取り憑いてからしばらく。

あなたは、友達が学校の連中のせいで嫌な思いをしていることを知る。

友達は、幽霊がなんだの気味が悪いだのなんだのと言われているようだ。

どうやら幼い頃に怪異が見えた影響で、周囲の人々から変人扱いされているらしい。

聞くに耐えない耳障りな罵声と、傷ついたような顔をする友達に、あなたは酷く不快な気持ちになる。

あなたという怪異は、人間の道徳に縛られない。

あなたは自らの力を用いて、友達を傷つける鬱陶しい人間を懲らしめてやることにした。

あなたにできること

あなたは友達を傷つける悪いやつに仕返しをします。

なにをするかは、あなたが好きに決めていただいて構いません。

また、その結果悪いやつがどうなっても大丈夫です。

手足がちょびつともげようが、死のうが、そんなのは些細なことだからです。

重要なのは、あなたが友達のために、悪い人間を懲らしめるということ。

有象無象の人間の沙汰を、あなたが決めてあげましょう。

仕返しをするところを、自由に描いてみてください。

その様子を楽しんだら、次の描写に進みましょう。

選択肢：軽くお仕置き

あなたは軽くお仕置きすることを選びました。

転ばすとか、突き飛ばすとか、大事にはならない程度のことです。

それを受けた悪い人間は、「幽霊の仕業だ！」と喚きながら去っていきます。

その姿にあなたはすっきりすることでしょう。

しかしその捨て台詞は、友達に不安の芽を植え付けたようで、それ以降友達は、あなたを恐れるような態度を取るようになります。

選択肢：しっかりお仕置き

あなたはしっかりとお仕置きすることにしました。

重度の霊障による実害といった、命に関わるお仕置きです。

それを受けた悪い人間は、苦しみながらその場に倒れます。

その姿にあなたはすっきりすることでしょうが、周囲の人間たちは一斉に悲鳴を上げます。

そしてそれは、友達も同様でした。

友達はあなたが起こした惨劇にひどく怯え、怪異を……あなたを恐れ拒絶するようになります。

描写

あなたは仕返しをして、すっきりした気持ちになった。
懲らしめられた人間がどうなったかは、あなたにとって興味のないこと。

ちょっとした仕返しで泣きべそかいて帰っていたのか、二度と動かなくなったのか。

まあ、そんなことをいちいち確認する必要もないだろう。

重要なのは、友達の様子だ。

嫌な奴がいなくて、友達もきっと喜んでいるだろう。

「ひっ……！？ い、嫌、なにこれ……！？」

……喜ぶと思ったのに、友達はなぜか怯えた様子だ。

友達のためにしてあげたのに、なぜそんな反応をするのだろうか？

あなたはそれを、どうにも理解することができなかった。

4. 破綻

解説

友達との友情が破綻する場面です。

怪異と人間は相容れません。

残念ながらあなたもそうだったようです。

描写

元気になってほしくて、悪いやつに仕返ししてあげたのに、友達は怯えるばかり。

これは、どういうことだろう？

あなたの知る友達は、自分を見て、自分と遊んでくれたはず。
なのに今は、自分を見てくれないし、一緒に遊んでもくれない。

せめて自分に気づいてほしいと、そんな思いが湧き上がり、あなたは友達にちょっかいをかけることにした。

怪異は人間には見えないが、干渉できないわけではない。
物を動かしたり、ちょっぴり呪ってみたり。
あなたは怪異にできる範囲で、友達に干渉してみる。

あなたにできること

友達に気づいてもらえるように、怪奇現象を起こしてみましょう。
今の友達は、あなたの姿も声も、認識してくれません。
ですので工夫を凝らして、あなたの存在を友達にアピールしてみてください。

例えば、筆記用具を動かして、文字で意思疎通を図ってみたり。
近くの物を壊して存在感を示してみたり。
他にも友達を呪ってみれば、あなたを感じ取ってくれるかもしれません。

どのようにアピールするかは、あなたの自由です。
あなたらしいやり方で、友達に干渉してみてくださいね。

やるだけやって楽しんだら、次の描写に進みましょう。

描写

あなたが起こした怪奇現象に、友達は反応してくれた。

ようやく自分に気づいてくれたのだ。

その喜びが胸を満たす中、友達は声を発する。

「もう嫌だ……！ 誰か助けて……！」

友達が口走った拒絶の言葉。

それが、決定的だった。

あなたは気づいてしまう。

もうこの人間は、自分の知る友達ではないのだと。

その瞬間、あなたは目の前の人間を友達と思うのを、やめた。

人間は怯え、悲鳴を上げ、泣くばかり。

その人間を、あなたは――

あなたにできること

ここでは、あなたは友達……いえ、友達だった人間をどうするか、選ぶことができます。

選択肢は2つ。

その人間を殺すか、離れていくかです。

どちらを選んでくださっても構いません。

あなたの友情を裏切った人間が許せないなら、殺してしまうのもいいでしょう。

怪異の力を用いれば、人間の息の根など、いとも容易く止められるはずです。

危害を加える気にならないのなら、そのまま人間から離れるのもいいでしょう。

どうせその人間はもう、あなたを見てくれないのです。

あなたがどこかに行っても、友達はそのことに気づきさえしないでしょう。

人間を殺すルートか、人間から去るルートか。

選んだら、それぞれのルートの描写に進んでください。

描写（分岐：人間を殺すルート）

あなたはかつて友達だった彼女を殺すことにした。

怒りか、寂しさか、悲しみか。

なにがあなたをそうさせたのかは分からない。

ただ、あなたは彼女を許すことができなかった。

人間は怪異に敵わない。

驚くほど簡単に、友達だった彼女は、あなたの手で死に至った。

描写（分岐：人間から去るルート）

あなたはかつて友達だった彼女のもとから立ち去ることにした。

殺してもよかったが、あなたはそうしなかった。

まだ彼女に情があったのだろうか？

いずれにせよ、あなたはかつて友達だった人間のもとから離れていった。

もう二度と、彼女と会うことはないだろう。

胸を締め付けられるような思いに襲われる中、あなたたちの友情は破綻した。

エンディング

5. 少年と神さま

解説

この物語の最後の場面。
そして、あなたが神さまに食べられる場面です。
あなたという怪異の終焉を、お楽しみください。

描写

友達だった人間から別れて、どれだけの時間が経っただろうか。
しばらく彷徨っていたあなたは、気づけばある少年に取り憑いて
いた。

陰気で、どうにも取り憑きたくなるような、黒髪の少年だ。

このままこの少年を呪うのもいいか。
そう思った矢先に、あなたはソレと遭遇する。

ソレは、銀髪碧眼の少女の姿をした神さま。
あなたと同じく、怪異らしきモノ。

どうやらその「神さま」はあなたに取り憑いている「少年」と友
達のように、なにやら親しげに会話する様子が視界に映る。

——自分は友達と一緒にいられなかったのに。
「神さま」と「少年」を前に、そんな妬みが去来する。

八つ当たりをするように、「少年」を呪いたくなるだろうか。

嫉妬に任せて「神さま」を消したくなるだろうか。

けれど、あなたにはもう、なにもできない。

なぜなら「神さま」が、大口を開けてあなたを食らおうとしているからだ。

あなたにできること

あなたにできることは、もうなにもありません。

足掻こうがどうしても、「神さま」に食べられてしまうからです。

その結果は避けられませんが、多少抵抗することはできます。

「少年」に危害を加えようとしたり、「神さま」と戦おうとしたりするのでもいいでしょう。

もちろん、逃げようとしてみるもの楽しいと思います。

食べられる間際、あなたはどのような行動をしますか？

今際の際を楽しんだら、次の描写に進みましょう。

描写

「神さま」に食われる刹那。

あなたは、かつて友達と一緒に過ごした日々を思い出す。

なにかが違えば、ずっと友達のままでいられたのだろうか？

どうすれば、「少年」と「神さま」のようにあれたのだろうか？

あるいはこのふたりも、やがて自分と同じ末路を辿るのだろうか？

今更意味のない疑問が過ぎる中。

あなたは「神さま」に食べられて、消えてしまうのだった。

おつかれさまでした

これにて、この物語は終了となります。

おつかれさまでした。

あなたと友達の話は、悲劇で終わってしまいました。

けれど悲しまないでください。

なぜなら、怪異と人間は相容れないもの。

あなたたちの破綻は、普通のことであり、仕方のないことだったので。

そう……怪異と人間が友達でいられることのほうが、異常なので
すから。

さて、ならば「神さま」と「少年」は……。

「有鹿」と「晃」は、友達のままにいられるのでしょうか？

有鹿が——『303号室の神さま』がどのような結末を迎えるのか、
我々は見届けることにしましょう。

改めて、おつかれさまでした。

そしてここまで遊んでくださり、ありがとうございました。